

フルートとピアノのためのソナタ F.プーランク

Sonata for Flute and Piano
Francis Poulenc

◆◆ 第3回

講師・有田正広

それでは今回はプーランクのソナタの第2楽章を見ていきましょう。

前回にも書きましたが、この曲の全ての楽章で共通して注意することは、フレーズの後に置かれた休符の扱いです。これらは、音楽的な緊張を作るためのものなので、その緊張を壊さないように充分意識してください。また一方では、響きがその休符分ほしいということもあって、例えばタイが掛けられた音符をべったり演奏することをせず、響きを残すという意味もあり、そうすることで休符の緊張感が生まれる場合もあります。

プーランクは第1楽章をメランコリー・陰鬱というこを表現しながら、フルートの特性を生かした音楽に仕上げ

ましたが、第2楽章は伝統的な3楽章形式のソナタの緩徐楽章に相当する、非常に美しいアリアを考えています。「カンティレーナ」と題されていて、日本語に適訳が無いのですが、「詠嘆曲」、悲しみ表現する、或いは誌的・叙情的な悲しみを母体とした音楽であり、正に「歌」です。①“*Assez lent*”（十分に遅く）と書いてあり、もちろん奏者の息の量と長い音の表情にもよりますが、決して速いテンポにならないように。“*Assez*”は、同じフランス語の“*Très*”（大変、とても）より、もっと充分に、たっぷり、どこも隈なくという意味があるので、“*Assez lent*”をしっかりと意識して下さい。

前回お話した、元の形に近いと思われる1994年版（現行のもの）と、ランバルとの演奏の後で成立したと考えられる1958年版を較べると、②1994年版では3小節目に書かれている“*Doucement baigné de pédale*”（非常に柔らかく、そして流れるようにペダルを踏む）が、②'1958年版では1小節目に書かれています。これはおそら

く、この2小節間を3小節目から始めるこの曲のメロディーの導入と考えると、フルートとピアノの2声のハーモニーの移行を充分に響きを持って演奏してもらいたいと考えたのでしょう。3小節目からのメロディーを効かすために、美しい緊張感をピアノと共に作るように心がけましょう。2小節目の休符の部分で響きを残して緊張感を与えて、メロディーへと繋がります。

③1994年版では3小節のフルートの最初の音にアクセントが付いていますが、③'1958年版ではスタッカート（スラー・スタッカート）になっています。どちらでもいいと思いますが、もしアクセントを付けて演奏すると、最初の音に大きなエネルギーがかかってしまうので、プーランクの意思としては、おそらくそういった大きなエネルギーのアクセントではなく、その音に少し特別な表情を持つという意味だと思います。1958年版では、スラー・スタッカートに変えられていますので、その意味を充分理解した上で最初のf'の音を吹くようにしましょう。



プーランク

1994年版

2 Cantilena

① *Assez lent* (♩ = 52)

② *doucement baigné de pédale*

1958年版（第16版、1992年）

2. Cantilena

①' *Assez lent* ♩ = 52

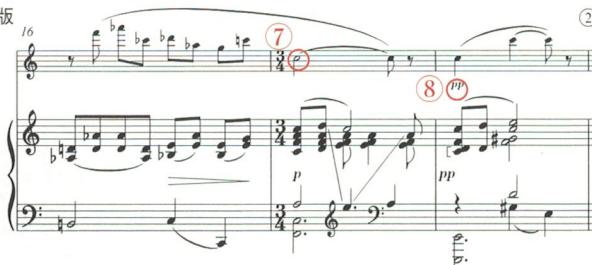
②' *Doucement baigné de pédale*



④練習番号1の3小節前（8小節）では大きなハーモニーの変化が見られます。ここで初めて出てくるフルートのas'の音に柔らかい表情を付けてas'とdes''の跳躍を、前の小節とは若干ちがった表情で演奏します。そして、練習番号1の1小節前で一瞬明るい響きがありますが、すぐさまピアノによってその響きも曇らされていきます。

ここまでのフルートのメロディーは非常に叙情的で悲しみを持ち、レガートで歌われますが、先ほどハーモニーの変化の所でふれたように、このメロディーの中の表現の中心となる要素の一つは跳躍です。⑤4小節目のf/f'からes''に行く音、4・5小節目のges''からa'にそっと降りる音、6小節後半から7小節へのf-b-des'-f'-b'-des'という動き、そして次の小節から先ほどのハーモニーの変化の小節の跳躍へと続きます。⑥これに対して、3小節や5小節の後半からのges'-f'-es'-es'(tr)といった流れるようなラインを持ったメロディーがあり、この2つの要素が中核となっています。練習番号1の2小節前半に大きな跳躍が出てきますが、これもレガートに、途切れないように響きを美しく繋げて演奏すると良いと思います。ここまでに現われるレガートには「懇願」を表すようなメロディーの表情があり、跳躍には「希望」のようなものを少し暗示しているようなところがあります。また、急にオクターブ下に落ちるような跳躍にはそこで力が失われてしまうような表情があります。練習番号1からさらにメロディーは発展していきますが、この後にもこれらの表情が出てきます。

⑦練習番号2の2小節前（17小節）では薄日が射したかのような柔らかい



音でこのc'を吹きましょう。⑧そして続くppでは、その薄日に陰りが出たかのような音で演奏します。このc'/c''のオクターブでは、2拍目のc''にアクセントが付かないように、1拍目から2拍目へ充分なレガートが要求されます。この練習としては、第1オクターブの総ての音で、第2オクターブ目の音を倍音で出す練習をします。その時の注意点は、同時にオクターブ2つの音を出せるようなアンブシュアを自分で作ることです。息の当たるポイントが歌口の外側過ぎるとこのオクターブは純粋には響きません。この奏法が所謂フレンチのタファネルやゴーバール以来受け継がれて来たものですが、音

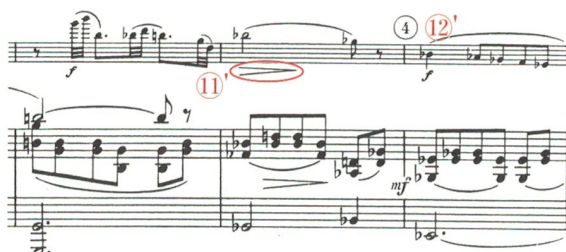
色の変化を作るのに役立つと思います。

⑨練習番号3（26小節）になって音楽が急に力強くなりますが、ここではピアノがあまり巨大な音にならないように注意しましょう。プーランクは初めfと書いたようですが、1958年版に見られるようにmfに変更しています。この推移を見るかぎり、フルートとピアノの音量のバランスに注意することが必要と考えられます。⑩そして練習番号3の2小節目のdes''からb'は1994年版にはデミヌエンドが書かれていませんが、1958年版では書かれているので、この2つの音をあまりべったり吹かないように、b'の音にデミヌエ

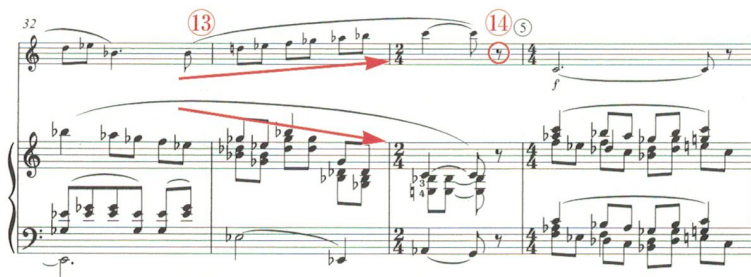
1994年版



1958年版 (第16版、1992年)



1994年版



ピアノを弾くプーランク

ンドしながら優しく降りていくようにします。⑪これは、練習番号4の1小節前(30小節)のフルートとピアノにもディミヌエンドが新たに書き込まれているので、同様に考えて良いと思います。

⑫練習番号4からはフルートの低音が用意され、それに対してピアノはフルートのオクターブ上でメロディーが被ってきます。このクロスしたメロディーの表情と、フルートピアノのバランスを充分に考えて演奏します。フルートは豊かな第1オクターブの演奏を要求されます。⑬練習番号4の3小節目からフルートは上へ、ピアノは下へと反進行していくので、音が自然と美しく広がっていくように心がけましょう。ただし、ディミヌエンドが書かれてはいませんが、最後の音に向かってディミヌエンドするように気をつけて下さい。⑭そして練習番号5の1小節前(34小節)の8分休符では、練習番号5の音を表情豊かに演奏するために、休符の緊張感を思い出して下さい。

⑮この楽章の中で初めての形で、練習番号5の3・4小節目に全く同じ8分音符のリズムで3声で書かれた部分が現われます。ここは、フルートとピアノが心の襞を表わすかのような動きで、美しい響きが要求されるので、フルートの音が突出しないように、3つの声部の音色が調和するように気をつけましょう。

⑯練習番号6(41小節)から、1994年版にはピアノの左手にスタッカートが書かれており、1958年版ではそのスタッカートが2小節外され、3小節目から書かれていますが、この3小節目のスタッカートはおそらくプーランクの外し忘れだと思えます。⑰1958年版には書かれ、1994年版では括弧書きで“en animant”(活気をもって)と記されていて、⑱1958年版の練習番号8の1小節前(48小節)には“Ceder”と記されています。よく聴く演奏の中にはこの練習番号6からテンポが明らかに速くなっているものがありますが、練習番号6からあまり急激にテンポを

上げず、ほんの少し元気を増した感じでテンポに方向性がつくようにし、練習番号8の1小節前でその活気をついたテンポが緩むような形で演奏します。おそらくプーランク自身、練習番号6から練習番号8の間はテンポを変えないで考えていて、ランパルとの初演でここのテンポを若干変えることにしたのでしょう。この“Céder”にはリタルダンドとは違った意味があるので、練習番号6から急激に速くなり、練習番号8でリタルダンドという形はプーランクの意思とは違う演奏になるように思いますし、楽章全体のバランスとしても不自然なものになるでしょう。

練習番号8からはピアノのメロディーに対して、フルートが優しい溜息のような音で寄り添います。

練習番号8の4小節目にfが突然現われます。ピアノが非常に低い音で書かれています。ここではこの左手の低音によってピアノのメロディーの存在が希薄になって、全体としての音の響きが下に固まった印象で、フルートは練習番号8から3小節間のピアノの美しいメロディーと溜息の表情に対する混沌とした音を表わすようにします。そしてその後すぐにディミヌエンドし、練習番号9（59小節）に入る前のピアノのブリッジでハーモニーをきれいに整えていくようにしましょう。

⑱練習番号9からは元のメロディーに似たものが出てきますが、2小節目のces²の音が変化音なので、c¹とces²の違いを感じ、ces²の音を曇らせて演奏すると良いと思います。

最後の4小節間。悲しみがずっと続いた後に、その悲しみにもう馴れてしまったかのような諦め、しかもこの諦めは絶望的なものではなく、希望をもつような優しい響きで演奏すると良いと思います。最後のハーモニーも実際は非常に暗い音なのですが、印象としては暗さの中に明るさを持っているような音色で吹くようにしましょう。

では、今回は終楽章です。



1994年版

1994年版



1958年版（第16版、1992年）

1994年版



1958年版（第16版、1992年）



1958年版（第16版、1992年）



1994年版



有田正広（ありたまさひろ）
昭和音楽大学教授
桐朋学園大学古楽器科講師